

## 共通体育柔道における大学生の武道に対するイメージ変化

石川美久<sup>1)</sup>, 遠藤知里<sup>2)</sup>, 小田 梓<sup>1)</sup>,  
坂本道人<sup>3)</sup>, 鍋山隆弘<sup>1)</sup>, 小俣幸嗣<sup>1)</sup>

### The Change of Image toward Budo which the students attending Judo classes on the common Physical Education course

Yoshihisa ISHIKAWA<sup>1</sup>, Chisato ENDO<sup>2</sup>, Azusa ODA<sup>1</sup>,  
Michito SAKAMOTO<sup>3</sup>, Takahiro NABEYAMA<sup>1</sup>, Koji KOMATA<sup>1</sup>

#### Abstract

The purposes of this study are to clarify the change of image which students attending Judo classes on the common Physical Education course have towards a Budo, and to bring new findings which contribute to practice of Budo event in the physical education at university.

In this study, the questionnaire was made to 368 students attending Judo course in Tsukuba University to investigate image toward Budo, and clarified image structure of Budo by factor analysis. In addition, the questionnaire for 84 students attending Judo course all-year was made to verify what kind of change of image toward Budo was brought by one year experience in Judo.

The results were summarized as follows:

- 1) As a result of factor analysis, seven factors such as Traditional Spirit factor, Briskness factor, Entertainment factor, Fight factor, Difficulty factor, Pain factor and Dignity factor were extracted, and it was clarified that most students have images of traditional, affliction and difficulty toward Budo.
- 2) As for Briskness factor and Entertainment factor, it was found that there was obvious score improvement compared to beginning of first semester.
- 3) Trend which decreased between second semester as a peak and third semester in Difficulty factor and Pain factor was seen. It was clarified that negative images were reduced through one year course, and relieved afflictions.

Key words: Budo, Change of Image, Judo

---

1) 筑波大学

2) 常葉学園短期大学

3) 福岡大学

## I 緒言

本研究の目的は、共通体育「柔道」における大学生の武道に対するイメージの変化を明らかにし、大学体育における武道種目の実践に資する新たな知見を提示することである。

大学体育では、学生が自由に種目を選択し、半期で完結する開設形態が一般的である。そこでは生涯スポーツの実践を目指す立場から、誰もが取り組めて施設用具も整備しやすい種目が準備されることが多い。その一方で、これまでに取り組んだことのない種目に挑戦し、新しい気づきや価値観を得ることも大学体育の意義のひとつである。その観点からみたとき、武道種目は優れた教材といえる。しかし、柔道、剣道をはじめとする武道種目は、学生の嗜好や、施設、用具、指導者といった事情が影響しているのか、大学における一般体育の種目として広く行われているとはいえない。

ところで、体育の授業におけるスポーツ実践を通して、スポーツ種目のイメージや態度が変わることについてはよく知られており、それを裏付ける多くの報告がある（橋本ら、1976；中村ら、1997；関根ら、1996；三戸ら、1995；橘ら、2003）。たとえば、体育に対する態度を開講コース別に比較した徳永ら（1974）は、学生のスポーツ種目の好みによって態度に差がみられたことを報告している。

武道においても、種目のイメージに関連した研究がある。中学・高校生を対象とした、武道や柔道に対する一般的な認識を探ろうとするいくつかの研究報告では、武道種目が「恐怖感」のような否定的イメージで捉えられていることを報告したもの（河崎、1975；尾形、1978・1980）もあれば、授業での体験が「心身の鍛錬に効果がある」「おもしろさがある」のような武道に対する肯定的イメージを強めたことを示唆する報告（生田ら、2003）もある。また、大学生を対象としたものでは、「快活」、「社会性」、「意思の強さ」、「好戦的」が武道のイメージと

して捉えられており、男女間・学部間・経験の有無によってイメージに差があったことが報告されている（加賀、2007；小俣ら、1993）。

本研究は、3学期制の通年授業、専用道場、柔道専門教員において行われた筑波大学共通体育柔道を対象とし、受講学生の武道に対するイメージ変化を追跡しようとするものである。先述のように、大学体育において半期完結型授業が一般的であるという現状を考えると、本研究は極めて特殊な事例といえるかもしれない。しかし、このように通年で行う武道授業から得られた知見を応用し、授業の参加意欲や、武道への興味関心を喚起する方策も検討できるだろう。さらに、大学体育の教育カリキュラムにおける武道種目の強化、拡大などにも有用な資料を提示することが可能であり、本研究の意義が認められる。

## II 研究方法

大学生における武道のイメージの変化を明らかにするため、本研究では2つの研究課題を設定した。研究課題1は、柔道受講生が抱く武道のイメージの構造を明らかにすることとした。研究課題2は、実際の大学体育における柔道の授業を事例として、通年履修した受講生の武道に対するイメージの変化を明らかにすることとした。以下、それぞれの研究方法についての詳細を示した。

### 1. 柔道受講生が抱く武道のイメージの構造

#### (1) 調査対象者

3学期制通年で同一種目を開設している筑波大学において、平成19年度から平成21年度に共通体育「柔道」（同一の教員が担当）を受講した学生368名を対象とした。性別と柔道経験について無記入の回答が4件あったが、それ以外の回答に不備がなかったため分析の対象とした。男女比や柔道経験の内訳を表1にまとめた。男子は経験者78名、未経験者125名の203名、

女子は経験者 95 名、未経験者 66 名の 161 名、無回答による不明者 4 名の合計 368 名である。男子においては未経験者が多く、女子は経験者が多かった。

表 1 調査対象者の内訳

	経験者	未経験者	不 明	合計
男 子	78	125		203
女 子	95	66		161
不 明			4	4
合 計	173	191	4	368

## (2) 調査項目および手続き

平成 9 年度から平成 11 年度に行われた共通体育「柔道」受講生の授業終了時（3 学期末）に取った 224 人分の感想文から、柔道に対する印象変化が語られている部分を抜き出し、意味が通る程度に文末等を修正して、150 項目をカード化した。これを KJ 法によって整理し、最終的に 30 項目にまとめた。その 30 項目を－3 から＋3 までの 7 段階（全然感じない：－3－2－10＋1＋2＋3：非常に感じる）で評価させる質問紙を作成した。

この質問紙を用いて、共通体育「柔道」受講生を対象とし、授業を担当した教員が本研究の概要を説明した上で、理解の得られた学生に対し、授業を通した武道のイメージについて回答するよう伝えて調査を実施した。授業開始後 3

カ月から 7 カ月（1 学期の終わってから 2 学期開始後約 1 ヶ月間）の時期に、授業時間内に調査の時間を設け、質問紙への記入を求めた。

## (3) 結果の分析

調査結果について、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。

## 2. 通年履修による武道に対するイメージの変化

### (1) 研究対象

#### 1) 授業概要

共通体育「柔道」において、同一の教員が行った授業を研究対象とした（注 1）。

この授業は 3 学期制の 1 年間の通年で行われ、各学期 10 回の計 30 回で行われた。この授業における学習目標は「日本文化としての柔道を正しく理解して行動できるようになる。技術においても各自のレベルに応じて乱取を行い、その合理性を体得する」とこととされた。授業内容は、1 学期は柔道の基本動作、出足払、送足払といった比較的容易な投技、袈裟固の固技を学習するものであった。2 学期は、大外刈などの足で相手の足を刈って投げる刈技、担いで投げる背負投系の技、主に腰を使って持ち上げて投げる腰技系、さらに固技における横四方固、上四方固、乱取を学習し、より実践的な攻撃・防御の習得を目指すものであった。3 学期は、固技の腕挫十字固、柔道のルール、審判法など

表 2 1 年間の授業内容

1 学期（4 月－6 月）	2 学期（9 月－11 月）	3 学期（12 月－2 月）
1 オリエンテーション	11 復習・乱取	21 関節技・乱取
2 “	12 刈技系の技・寝技の攻撃・乱取	22 ルールと審判法・寝技乱取
3 礼法・基本動作・受身	13 体落・寝技の攻撃・乱取	23 寝技の試合
4 体力測定	14 腰技・絞技・乱取	24 VTR「柔道の審判法」
5 “	15 “	25 寝技の試合
6 受身と倒れ方	16 VTR「柔道の技と心」	26 寝技の試合
7 足払系の技・抑込技・乱取	17 寝技の攻撃・乱取	27 乱取
8 “	18 背負投系の技・寝技の攻撃・乱取	28 乱取
9 刈技系の技・抑込技・乱取	19 払腰系の技・寝技の攻撃・乱取	29 乱取
10 講義	20 払腰系の技・関節技・乱取	30 柔道の基礎知識

柔道を組織的に学習するものであった。授業内容をまとめ、表2に示した。

## 2) 調査対象者

筑波大学において平成21年度に「柔道」を受講した学生のうち、すべてのデータがそろっている84名を対象とした。男女比や柔道経験の内訳を表3にまとめた。男子は経験者16名、未経験者29名の45名、女子は経験者23名、未経験者16名の39名、合計84名である。男子においては未経験者が多く、女子においては柔道経験者が多かった。

表3 受講者の内訳

	経験者	未経験者	合計
男子	16	29	45
女子	23	16	39
合計	39	45	84

## (2) 質問紙

使用した質問紙は、研究1で用いたものと同じ調査用紙を使用した。

## (3) 調査時期

平成21年度における筑波大学の柔道受講学生を対象に、学期当初(4月)、1学期末(6月)、2学期末(11月)、3学期末(2月)の計4回実施した。これらのデータを比較し、通年履修による武道に対するイメージの変化について検討した。

## (4) 結果の分析

研究1で得られた因子ごとに、学期当初、1学期末、2学期末、3学期末の4つの時期の得点の差について、分散分析を行った。分散分析で有意な差がみられた場合のみ、LSD法による多重比較検定を行った。

# III 結果および考察

## 1. 柔道受講生が抱く武道のイメージ構造

最尤法・プロマックス回転で因子分析した結果、7因子が抽出された(表4)。

第1因子は、「伝統だ」「力強い」「奥深い」「精

神性がある」「日本的だ」「古い」といった、武道の精神的あり方をイメージさせる項目で構成されていることから「伝統精神」因子と解釈した。

第2因子は、「清潔だ」「静かだ」「すがすがしい」「美しい」「おだやかだ」「神秘的だ」といった、さわやかさをイメージさせる項目で構成されていることから「爽快」因子と解釈した。

第3因子は、「楽しい」「親しみやすい」「おもしろい」といった項目、また「硬派だ」についてはマイナスであることから、心をたのしませる、安心感がある、好奇心を引きつけるといった気持ちよさを表す感情、また硬派で取り組みにくいものではなく誰にも簡単に取り組めることをイメージさせる項目で構成されていることから「娯楽」因子と解釈した。

第4因子は、「活動的だ」「力強い」「豪快だ」「いさぎよい」「明るい」「カッコいい」といった、活発な勝負や争いをイメージさせる項目で構成されていることから「格闘」因子と解釈した。

第5因子は、「難しい」「複雑だ」といった、容易でなく理解が難しいことをイメージさせる項目で構成されていることから「困難」因子と解釈した。

第6因子は、「苦痛だ」「危険だ」「激しい」「男性的」「保守的だ」といった、精神や肉体が感ずる苦しみや痛みをイメージさせる項目で構成されていることから「苦痛」因子と解釈した。

第7因子は、「礼節がある」「厳しい」といった、心の姿勢を重んじる武道の教育的価値をイメージさせる項目で構成されていることから「品格」因子と解釈した。

なお、項目「力強い」に関しては、因子I、因子IVの二つの因子において因子負荷量が高く、両因子に含めることとした。また、 $\alpha$ 係数については、「伝統精神」では $\alpha = 0.72$ 、「爽快」では $\alpha = 0.75$ 、「娯楽」では $\alpha = 0.56$ 、「格闘」では $\alpha = 0.75$ 、「困難」では $\alpha = 0.57$ 、「苦痛」では $\alpha = 0.63$ 、「品格」では $\alpha = 0.72$ であった。

今回の研究では、たとえば伝統精神因子の「日

表4 武道のイメージの因子構造

	I	II	III	IV	V	VI	VII	共通性
日本的だ	.64	-.03	.17	.01	-.06	.08	-.07	.34
伝統的だ	.58	-.08	.07	.02	-.05	.07	.27	.53
古い	.43	.07	-.11	.05	.17	.21	-.08	.53
奥深い	.41	-.02	.27	-.18	.07	-.10	.32	.40
精神性がある	.32	.15	-.07	.25	-.03	-.04	.21	.48
清潔だ	-.12	.75	-.17	-.06	.10	.02	.05	.46
静かだ	.13	.68	.04	-.36	.12	.05	-.03	.46
すがすがしい	-.15	.61	.16	.13	-.11	.08	.20	.55
美しい	.05	.58	.16	.07	-.01	-.01	.11	.53
おだやかだ	-.02	.55	.07	-.02	.01	.01	-.20	.28
神秘的だ	.22	.44	.11	-.02	.22	.14	-.10	.35
楽しい	.12	-.02	.79	.05	-.04	.04	.00	.61
親しみやすい	.08	.07	.76	-.07	-.08	.10	-.05	.54
おもしろい	.09	.04	.60	.22	.13	.22	-.06	.61
硬派だ	.17	.23	-.24	.22	-.01	.20	.16	.40
活動的だ	-.13	-.10	.17	.66	.15	.00	.05	.58
力強い	.50	-.22	.00	.64	-.04	-.07	-.09	.62
豪快だ	.20	-.19	-.03	.54	.24	.12	-.06	.54
いさぎよい	.30	.18	-.22	.53	-.11	-.10	-.07	.51
明るい	-.20	.38	.28	.47	-.11	.07	-.16	.53
かっこいい	.09	.19	.16	.28	.23	-.21	.16	.49
難しい	.05	.14	-.08	-.01	.76	-.04	.02	.58
複雑だ	-.10	.08	.02	.13	.53	-.06	-.04	.29
苦痛だ	-.11	.01	-.04	.08	.19	.51	-.08	.41
危険だ	-.11	-.17	.11	-.04	.24	.44	.00	.41
激しい	-.02	-.30	.16	.39	.00	.37	.16	.46
男性的	.13	.09	.00	.04	-.09	.58	.01	.32
保守的だ	.16	.19	-.02	-.10	-.20	.57	.00	.28
礼節がある	.20	-.06	-.01	-.07	-.15	-.01	.78	.66
厳しい	-.01	.03	-.19	.08	.23	.01	.62	.62
$\alpha$ 係数	.72	.75	.56	.75	.57	.63	.72	
因子間相関		II	III	IV	V	VI	VII	
	I	.39	-.12	.32	.23	-.03	.54	
	II		.20	.30	-.06	-.21	.30	
	III			.26	.05	-.27	.00	
	IV				.32	.13	.50	
	V					.44	.35	
	VI						.04	

本的だ」「精神性がある」といった項目などのように、因子負荷量および共通性について十分な値が得られなかった項目がある。しかし、次に述べるような武道独特の価値観を考慮して、研究2においてはそれらの項目も分析の対象とした。

武道には、「楽しさ」や「かっこよさ」、または「勝敗へのこだわり」というような、競技スポーツによって体験される一般的な感情とは一線を画する独特の世界観がある。武術（格闘）をスポーツ化し、精神面を大切にす意図から道が付けられた種目が武道であり、それゆえ「勝てばよいのではない」という共通の価値観がある。また、このような相手のことを常に思い遣る価値観は、日本の文化的背景とも密接な関係があり、研究対象とした授業の学習目標においても、「日本文化としての柔道を正しく理解して行動できるようになる」ということが挙げられている。さらに、柔道の創始者である嘉納治五郎は、講道館柔道を体育、勝負、修心の三つを目的として掲げている。この修心の中には、柔道に依る人間造りを志し、「精力善用」「自他共栄」といった精神的な価値が含まれている。本研究の質問紙の「精神性がある」という項目や、「日本的だ」という項目は、これらの意味を表現しているといえるだろう。このように、内容的に妥当と考えられる項目を積極的に分析に含めるために、敢えて項目の精選を行わずに

全ての項目を採用した。

上述の通り、柔道受講者の武道のイメージ構造として7因子が見いだされたが、これまでの研究においても類似したイメージ構造が明らかにされている（小俣ら、1993；鍋山ら、2008）。小俣ら（1993）の研究では、「武道性」「恐怖性」「態度向上」の各因子が、本研究の「困難」「苦痛」「品格」の各因子と類似している。また、鍋山ら（2008）の「爽快安心」「明快」「動的」「難解」「苦痛」の各因子は、本研究の「爽快」「娯楽」「格闘」「困難」の各因子と類似している。つまり、柔道や武道系種目を受講する学生の武道に対するイメージは、楽しいけれども難しく、そして苦痛な側面もあるが、精神的な価値を持つものとしてイメージされていることが推測できる。

これらは、質問紙、調査対象者や授業担当教員が異なることから同様の結果として見ることに限界があるが、柔道の特性をあらわす傾向としてとらえてよいものと思われる。

## 2. 通年履修による武道に対するイメージの変化

各因子の得点を用いて、時期による差についての分散分析を行った結果を、表5に示した。「爽快」因子、「娯楽」因子、「困難」因子、「苦痛」因子で時期の効果が有意であり、「品格」因子では有意傾向であった（「爽快」：F（2.66, 220.69）= 2.95,  $p < .05$ , 「娯楽」：F（2.61, 216.81）= 7.97,  $p < .01$ , 「困難」：F（2.58, 214.32）= 3.83,  $p < .05$ ,

表5 武道のイメージの変化

因 子	学期当初		1 学期末		2 学期末		3 学期末		F
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
伝統精神	2.04	0.64	2.06	0.70	2.00	0.77	1.94	0.79	1.52
爽快	0.22	0.91	0.17	0.97	0.39	0.91	0.36	0.87	2.95 *
娯楽	0.56	0.87	0.82	0.86	0.84	0.95	0.95	0.79	7.97 **
格闘	1.36	0.69	1.46	0.74	1.34	0.81	1.37	0.80	1.39
困難	0.94	1.05	1.12	1.02	1.32	0.98	1.03	1.01	3.83 **
苦痛	0.50	0.75	0.64	0.77	0.65	0.81	0.47	0.81	2.79 *
品格	2.21	0.70	2.19	0.83	2.04	0.74	2.05	0.75	2.49 †

\*\* $p < .01$    \* $p < .05$    †  $p < .10$

「苦痛」:  $F(3.00, 249.00) = 2.79, p < .05$ , 「品格」:  $F(3.00, 249.00) = 2.49, p < .10$ 。

LSD 法による多重比較の結果を図 1～図 4 に示した。結果の特徴をわかりやすくするため、グラフは項目数で割った平均値を用いた。「爽快」因子(図 1)では、1 学期末と 2 学期末(1 学期末 < 2 学期末), 1 学期末と 3 学期末(1 学期末 < 3 学期末)との間に、有意な差が認められた( $MSe = 13.35, p < .05$ )。

有意な差は認められなかったものの、学期当初から 1 学期末で得点の下降がみられた。これは、筑波大学では 1 学期の授業全 10 回中 3 回分が共通体育全体のオリエンテーションや体力測定に費やされ、他の学期に比べて実際に柔道を行う授業時間が少ないこと、また礼法や受身といった基本動作が学習の中心となり、柔道の組み合う、投げる動作といった柔道の特徴を感じられる機会が少ないことが考えられる。学期当初からの慣れない受身、基本動作練習は、生田ら(2003)が指摘するように、「柔道の組み合う中で投げたり投げられたりというイメージ」を持っていた学生にとって「ただ畳を叩く受身練習」は単調で苦痛なものとして捉えられ、爽快なイメージを下げることに影響したかも知れない。また、1 学期末と 2 学期末・3 学期末における上昇については、基礎技能の習得が進

み投技・固技での攻撃・防御、つまり乱取ができるようになり、相手を投げたり、抑えたりするといった柔道のおもしろさを十分に感じられるような動きを経験できるようになったことによって、肯定的なイメージの変化がもたらされたことが理由と思われる。

「娛樂」因子(図 2)では、学期当初と 1 学期末(学期当初 < 1 学期末), 学期当初と 2 学期末(学期当初 < 2 学期末), 学期当初と 3 学期末(学期当初 < 3 学期末)との間に、有意な差が認められた( $MSe = 5.23, p < .05$ )。

柔道の経験時間を重ねることによって、次第に柔道の楽しさ、面白さに気づいていく様子がよみとれる。生田ら(2003)は、授業終了時(20 単位時間後)の調査において、「柔道はおもしろいというイメージが大きくなっている」と報告している。本研究においても、学期当初と 1 学期末、2 学期末、3 学期末に有意な差があることから面白さ、楽しさが上昇しており、同様な傾向を示している。先述のように、1 学期の前半は、基本動作が中心であり、柔道の一つである投げる投げられるといった投技・固技に十分に達していないにもかかわらず「娛樂」因子に上昇がみられたということは注目に値する。基本動作においても、少なからず楽しさ・おもしろさを感じているものと考えられる。た

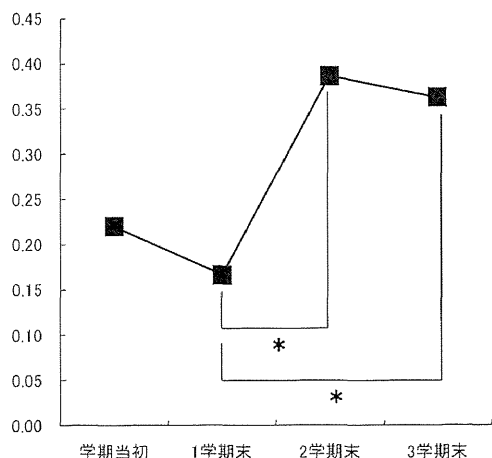


図 1 「爽快」因子

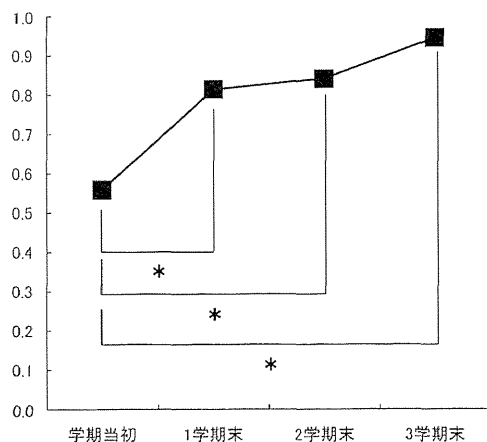


図 2 「娛樂」因子

だし、学期当初の緊張感が緩和されたことや、授業を重ねることで教員や受講生同士の人間関係が深まり居心地が良くなっていることなど、柔道以外の要因が影響していることも考えられ、今後追加の調査が必要である。

生田ら（2003）は、「寝技の試合を行い、終盤では審判のいる中で試合練習を行っているなど柔道の試合に触れる機会が多かったことが『試合のおもしろさがわかった』につながった」と指摘している。本研究においても3学期は、寝技の試合や乱取が中心であることから、おもしろさは2学期よりもさらに継続している要因の一つと考えられる。

「困難」因子（図3）では、学期当初と2学期末（学期当初＜2学期末）、2学期末と3学期末（2学期末＞3学期末）との間に有意な差が認められた（MSe = 2.71,  $p < .05$ ）。

2学期末をピークに3学期末で下がっていることが特徴的である。これは、2学期末までに、基本動作や投技、固技のたくさんの技を学習することで、技の多様性と施技の難しさや複雑さが強く感じられるようになったことが影響していると考えられる。一方3学期末では、一定の技を学習したことと乱取に慣れてきたことによって、2学期末の時点で最大まで高まっていた「困難」なイメージが和らぎ、得点を低下さ

せる要因であったと考えられる。

「苦痛」因子（図4）では、1学期末と3学期末（1学期末＞3学期末）、2学期末と3学期末（2学期末＞3学期末）との間に有意な差が認められた（MSe = 6.68,  $p < .05$ ）。

先ほどの「困難因子」と同様に、2学期末をピークに、3学期末で下がるという結果がみられた。

3学期は、12月から2月までの寒い時期であり、柔道衣の着替えに躊躇したり、相手とぶつかる、投げられるといった肉体的苦痛が発生したりするよう思われたが、苦痛なイメージは3学期末では低減するという結果となった。寒い時期の乱取中心の内容でありながら、実際に多くの相手とかかわりながら練習を重ねていくことにより、苦痛なイメージよりも、柔道に対して楽しい、面白い、親しみやすい、清々しいといったイメージが生じてきたとみられる。他にも、1月の寒中時期に行われる寒稽古を経験し寒さに耐えたことや2学期末まではたくさんの技を学習したことで、乱取に慣れが生じて投げられる恐怖などから解放されて、危険な意識が減少した可能性も考えられる。

ところで、松永（1981）が「柔道の指導者は、単なる競技伝授に終始することなく、精神面の修養という面も含んだ指導に当たらなければな

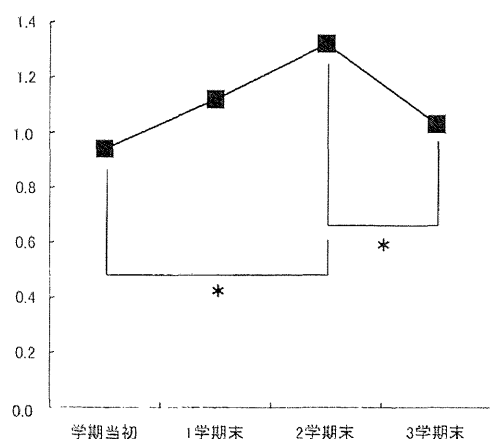


図3 「困難」因子

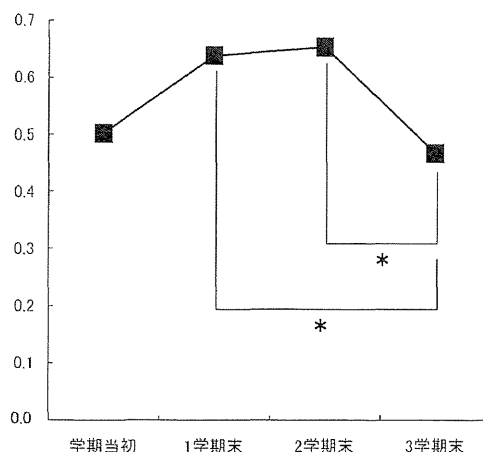


図4 「苦痛」因子

らない」と指摘し、武内（1986）が、「柔道は、身体的発達、人間形成、精神力の育成に寄与し得る」と報告しているように、柔道を学ぶ者には人格面、精神面の成長がもたらされることが期待される。しかし本研究では、柔道経験によって「伝統精神」因子に差はみられなかった。伝統精神因子の項目別得点を詳細に検討すると、項目の評価方法は－3から＋3までの7段階であったが、－の評価がもともと少ないということがわかった。つまり、実際に柔道を体験したことがない学生でも、知識として形成された伝統精神イメージをもともと強く抱いており、それが得点の高さに反映したものと思われる。もともと強く認識されていたため、授業で実際に柔道を学ぶ体験を通して、大きく変化することがなかったものと理解することができる。

#### Ⅳ 結論

本研究では、筑波大学における共通体育「柔道」受講者368名を対象に武道に対するイメージの調査を行い、因子分析によって武道のイメージ構造を明らかにした。さらに、通年履修における柔道受講生84名を対象に、1年間の柔道経験が武道イメージにどのような変化をもたらすのかを検証した。その結果、以下のことが明らかとなった。

- 1) 因子分析の結果、「伝統的だ」「奥深い」などの「伝統精神」因子、「清潔だ」「静かだ」などの「爽快」因子、「楽しい」「親しみやすい」などの「娯楽」因子、「活動的だ」「力強い」などの「格闘」因子、「難しい」「複雑だ」の「困難」因子、「苦痛だ」「危険だ」などの「苦痛」因子、「礼節がある」「厳しい」の「品格」因子の7因子が抽出された。
- 2) 「爽快」因子、「娯楽」因子は、学期当初と比較して、明らかな得点向上が認められた。
- 3) 「困難」因子、「苦痛」因子は、2学期末をピークとして3学期末にかけて低減する傾向が見出された。

大学体育の教育カリキュラム改善の観点から、武道種目は学生のスポーツ体験の幅を広げるためにも有用であり、今後他大学でも広く取り組まれることが望まれる。今回得られた知見を応用し、武道系授業への参加意欲や、武道への興味関心を喚起する方策を今後検討していきたい。

また、本研究では受講者全体の流れをとらえて、1年間の柔道経験が武道イメージにどのような変化をもたらしたかを明らかにできたが、より詳細なイメージの変化を把握するためにも今後は、受講者の武道経験の有無、性別による側面から検討することが求められる。

#### 注

- 注1) 施設や学級規模などの物理的条件が整備された中では、教官独自の指導によって態度変容が異なること（徳永ら、1974）という指摘があるため。

#### Ⅴ 文献

- 橋本公雄、徳永幹雄：体育の授業形態が態度変容に及ぼす影響（第3報）－一般実技コースの履修期間の変化について－、福岡工業大学研究論集、8、104-115、1976。
- 生田祐介、村松常司、森勇示、金子修己、金子恵一、大河内信之：高等学校における柔道授業に関する研究、愛知教育大学保健体育講座研究紀要、28、27-36、2003。
- 加賀勝：武道に対するイメージに関する研究、岡山大学教育学部研究録、94（1）、19-24、2007。
- 河崎武夫：柔道のイメージに関する研究、柔道、46（10）、57-63、1975。
- 小俣幸嗣、中村良三、藤堂良明、佐藤伸一郎、高橋幸治、青柳領：正課体育柔道受講生の柔道に対するイメージの研究、大学体育研究、15、11-22、1993。

- 松永義雄：運動種目に対するイメージに関する研究 1－柔道選手が持つ「柔道」に対するイメージについて－. 東海大学紀要体育学部, 11, 29-35, 1981.
- 鍋山隆弘, 堀出知里, 坂本道人, 成瀬和弥, 小俣幸嗣：共通体育武道系種目プロジェクト研究報告 (1). 大学体育研究, 30, 87-91, 2008.
- 中村靖, 白井良昌, 相良博昭：大学正課体育におけるゴルフの意識調査－履修者の実施後のイメージ変化について－. 関西外国語大学研究論集, 66, 541-552, 1997.
- 尾形敬史：柔道に対する意識の研究 (第一報)－中学生を対象として－. 武道学研究, 11 (2), 32-34, 1978.
- 尾形敬史：柔道に対する意識の研究 (第二報)－高校生を対象として－. 柔道, 51 (5), 60-66, 1980.
- 三戸範之, 浦井孝夫：大学生の体育・スポーツの意識に関する研究－興味・関心及びイメージについて－. 秋田大学教育学部研究紀要教科部門, 48, 81-90, 1995.
- 関根章文, 飯田稔, 吉田章, 橘直隆, 井村仁：野外運動理論・実習受講生の自然に対するイメージの変化. 筑波大学運動学研究, 12, 77-83, 1996.
- 橘直隆, 蓬田高生, 土方圭：野外運動の授業が学生の生きる力に及ぼす影響. 大学体育研究, 25, 19-29, 2003.
- 武内政幸：本学々生の柔道に対するイメージの因子分析的研究－女子運動部員と非運動部員との比較－. 大東文化大学紀要自然科学, 24, 137-149, 1986.
- 藤堂良明：「武道」としての学校柔道のあり方について. 武道学研究, 26 (1), 1-8, 1993.
- 徳永幹雄, 荒井貞光：学生の体育実技に対する態度変容とその要因 (第2報). 体育学研究, 18 (5), 287-295, 1974.